

環境文化創造センター

自由学園のキャンパス・フィールド活用の推進

吉川 慎平

環境文化創造センター(以下、Eセンター)は、自由学園(以下、学園)全学の環境に関わる教育・研究・社会活動をリードし、支援するセンターとして2018年度に発足した。2023年度について、それぞれ体制並びに概要は主なトピックについて報告する。

1. 2023年度報告

1) 2023年度の体制並びに概要

2023年度は発足6年目を迎え、メンバーはセンター長:吉川慎平(最高学部准教授)、次長:鈴木康平(学部長補佐・最高学部特任教授)、次長:小田幸子(最高学部准教授)、研究員:柏木めぐみ(最高学部特任助教)、研究員:遠藤智史(女子部中等科・高等科教諭)の5名で、前年度から変更はない。

2023年度は、主軸としている学園が保有する教育的資産であるキャンパスやフィールド(農場・植林地等)とその周辺地域の更なる利活用に向けた取り組みを推進した。またEセンターメンバーが直接または間接的に、キャンパス・フィールドを活用した教育・研究・社会活動を生徒・学生とともに実践し、発信に努めることとした。以下に新規と継続案件それぞれについてのトピックを記す。

2) ホームページ(ブログ)・Instagramでの情報発信・Eセンターニュースの発行

2023年度はEセンターのブログを7件更新(2022年度74件)した。最高学部ホームページにも関連記事を掲載している。また最高学部に関わる部分を中心に最高学部InstagramでもEセンターの活動を発信した。2022年度は、これらをEセンターニュースに再掲する形で、毎月の発行・配信を目指したが、膨大な編集時間を要するため2023年度は13号1回(12月)の発行に留めた。

3) エコプロ2023への継続出展

2023年12月6日～8日の3日間に渡り東京ビッグサイトで開催された「エコプロ2023」に自由学園として出展した(2年連続2回目)。2022年と異なり大学・教育研究機関コーナーにブースを構え、「足もとから考える環境問題～Think Globally, Act Locally～」をメインテーマに、2023年3月に開催したオンラインイベントをベースに、最高学部生

(一部は、女子部、男子部参加)の自主活動の中から、①リジェネラティブ・オーガニック農法(RO農法)への挑戦、②キャンパス丸ごと大きな実験室に一水文・気象観測室の紹介、③自由学園のスクールシンボル選定の取り組みについてPRした。300名を超える方と直接コミュニケーションできた他、最高学部生、教職員、更には卒業生の来場もあった。2024年度(12月5日～7日)は最高学部生(ゼミ)を主体とした形での出展を検討する。

4) 環境副読本『JIYU エンサイクロペディア(仮)』のプレリリース

自由学園のキャンパス・フィールドの教育利用を推進するべく、これまでにEセンターが蓄積した知見や、自由学園のアーカイブ等を活用したオリジナルの環境副読本「JIYU エンサイクロペディア(仮)」の発行を検討している。2023年度は最高学部のフィールドサイエンスゼミとの連動で、名栗植林地に関するテキストの整備から推進することとした。歴史・地形・地質・植生・動物・水質等について、2024年度にプレリリースを予定している。

5) その他新規・継続案件

① 自由学園のスクールシンボル 木・花・鳥:

Eセンターが所管する学園創立100周年記念事業として、次の時代に向けて「生物多様性」の保全への関心や、学園への愛着並びに関係者の連帯感がより深まる事を願い、学園の歴史・文化・庭園・自然・環境・景観の象徴として、既定の「花(ウメ)」の他に「木・鳥」等を新たに複数選定し、2022年11月23日に公表することができた。実際に最高学部の卒業感謝会等でスクールシンボルの活用が見られた。予定している南沢、那須、植林地のシンボルの決定と公表については、現地調査やヒアリングにより候補種の内定を進め、最適な公表のタイミングについて現在検討を進めている。シンボルをモチーフにしたグッズの開発については、

紙製コースターを製作し、2023 年 5 月の南沢での友の会大会等で頒布した。今後、自由学園(協力会)グッズへの活用などが期待される。認知度の向上の一環で、2023 年 4 月より新入の中高生、教職員にパンフレットを配布した。今後、毎年実施していく。

② 東久留米市(地域)関係:

6 月 4 日に全国水環境マップ実行委員会主催の「身近な水環境の全国一斉河川調査」に参加した。学園は調査が全国規模になった 2004 年の第 1 回以降、20 年連続の参加となる。学園は校内を流れる立野川を含め、東久留米市内の 16 地点を担当している。2023 年は最高学部学生 3 名と教員 2 名の計 5 名が参加した。

森林環境譲与税を充当した東久留米市向山緑地若返り事業(2019～2023 年度)の最終年度に当たり、環境普及教育イベントの共催、および調査・研究等を実施した。また毎年 6 月に開催される「第 27 回東久留米市環境フェスティバル」は、以前のような対面形式で 6 月 10 日～11 日の 2 日間に渡り開催され、学園が団体会員となっている向山緑地・立野川勉強会と共同で参加した。

12 月 17 日に自由学園高等科・最高学部が例年参加している「川でつながる発表会(第 19 回)」が埼玉県新座市の新座市立歴史民俗資料館を会場に開催され、最高学部の水文・気象観測室の活動を紹介するポスターを交流会会場に展示した。

③ 「木の学び」・「水の学び」と植林地活用:

最高学部 1・2 年の飯能・名栗フィールド活動を支援した。2023 年度から最高学部 2 年生については、飯能市の名栗地区を知る目的で、名栗湖(有間ダム)の見学、湖畔のカヌー工房見学とカヌー試乗を行った。また必修講義と連動し「自然の中からデータを取り出すこと」をテーマに、カヌーに乗りながら湖面での水質測定体験、入間川での流量観測体験なども開始した。

④ 自由学園水文・気象観測システムの運用:

最高学部棟屋上露場については、2019 年度に導入し 2023 年度で 4 年目となった。最高学部生による水文気象観測室を支援し維持管理を継続した。名栗、海山植林地の観測機器充実、老朽化した那須農場の観測機器更新を進めた。成果については『自由学園年報』への気象統計情報の掲載を継続した。また東久留米市との包括連携協定の一環で、市発行の『かみきょう東久留米』への気象統計情報の提供依頼があり、これに対応した。取得したデータの管理が

煩雑であることから、環境データベース(プラットフォーム)の整備が急務であり、今後外部の協力も得て検討していきたい。

⑤ 自由学園キャンパスカードの発行:

自由学園のキャンパス・フィールドについての基本的情報をまとめた「自由学園キャンパスカード」を制作し、2022 年 4 月に行われた最高学部の「飯能・名栗フィールド活動」に合わせて配布を開始した。現地訪問時に 1 人 1 枚受け取ることができる、「ダムカード」を模したミニ版パンフレット(88mm×63mm)という位置付けで、現地に足を運ぶ楽しみと、現地の理解を醸成するツールとして活用している。名栗植林地、新名栗フィールド、海山植林地、那須農場については発行済みである。

⑥ 外部講師等の派遣:

2023 年 11 月にドイツ系 IT 企業 SAP ジャパンのサステナビリティ活動推進チーム主催の社内研修会「農業と地球温暖化について学び、考える」で、「環境再生型有機農業」と題し、鈴木が 2022 年度から RO 農法グループの学生と行っている活動について講演した。

⑦ 内部広報の推進:

2024 年 3 月 25 日の学園全大会で、E センターの活動報告を初めて実施することができた。また出席の教職員に対してキャンパスの利用状況についてのアンケートを実施し回答を得た。報告後、様々な連携等の依頼が寄せられている。

⑧ 学会等での発表:

E センターのメンバー(教員)と最高学部の学生が土木学会、日本地下水学会、日本緑化工学会、日本水環境学会、日本森林学会等で複数発表した。E センター関係は次の通り。2023 年 9 月の日本緑化工学会で「自由学園におけるスクールシンボル選定と候補種募集アンケート結果の分析(吉川・小田)」、「ネパール国カブレ郡での地域連携による森づくりパナウティの Community Forest における実践例一(小田)」。2024 年 3 月の日本森林学会で「東京都東久留米市の高齢化した雑木林における伐採後の萌芽状況(伊澤・柏木ら)」。

2. 参考文献

- * 2023 年度報告は「2023 年度環境文化創造センター事業報告(理事会・評議員会向け)」(自由学園環境文化創造センター 2024 年 5 月 7 日)を再構成した。